

機関番号：17401

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20592538

研究課題名（和文） 乳がん患者への治療決定支援に対する実践能力を育成する教育プログラムの開発

研究課題名（英文） Development of educational program that promote treatment decision support to breast cancer patient

研究代表者

国府 浩子（KOKUFU HIROKO）

熊本大学・大学院生命科学研究部・教授

研究者番号：70279355

研究成果の概要（和文）：

乳がん患者は、意思決定を行う中で中等度の葛藤を示し、「不確かさ」や「感情の不安定さ」がその困難さに影響を与えていた。一方、看護師は個別の情報提供やパートナーへの関わり、医師からの支援獲得に困難さを感じ、その実施度が低かった。この傾向は、経験年数が浅い看護師・外来看護師に強く、レベルに応じた教育が必要であることが明らかになった。その結果を踏まえ、意思決定支援に必要な看護師の知識と技術内容を検討し、ガイドブック作成に取り組み、教育プログラム（案）を作成した。

研究成果の概要（英文）：

The breast cancer patients showed the conflict of the moderate degree while choosing the initial treatment, and "Uncertainty" and "Instability of feelings" influenced the difficulty. On the other hand, the nurses felt the difficulty to provide the individual information. They didn't support the patients with the partner, and they couldn't get the advice from a doctor. This tendency was strong in the nurse with a little experience and the outpatient nurse. It was clarified the education according to the level was necessary. We examined nurse's knowledge and technical content necessary for the decision aiding based on the result. We worked on the guide book making, and made the educational program.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：がん看護

科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学

キーワード：がん看護，意思決定，乳がん

1. 研究開始当初の背景

(1) 患者自身による治療方法の選択は、病気

の受容を促進し、治療に伴う苦痛や病状変化への適応に効果があると報告されている。

(2) 乳がん患者は、治療法決定を行う機会が多いが、その治療法の選択は複雑かつ困難である。葛藤を伴う患者の意思決定プロセスに、看護師が十分な援助を提供しているとはいえない。

(3) 乳がん患者の意思決定に関する研究は、情報提供や意思決定への参加、プロセスとその影響要因、治療選択の満足度など多くの研究がなされている。しかし、多くが乳がん患者を対象にしたものであり、看護援助に関する研究は少ない。また、意思決定を支援する看護者側に焦点を当てた研究はない。

(4) これまでの研究結果から、乳がん患者の術式選択に対する看護援助の示唆はあるが、プロセスの時期や患者の状態を考慮した具体的な援助方法は明確になっていない。

2. 研究の目的

(1) 意思決定支援を行う上で看護師がもつべき基本的実践能力と現在行っている看護援助、熟練看護者の実践の知識と技術を明らかにする。

(2) 意思決定支援を行う上での課題を明確にする。

(3) 現在の課題を踏まえたうえで現状に即した教育プログラムを開発する。

3. 研究の方法

(1) 初期治療選択を行う乳がん患者に対する看護支援調査

① 看護実践調査：乳がん看護セミナーに参加した看護師 137 名に乳がん患者の初期治療の意思決定に関する看護実践状況について自記式質問紙調査を行い、基本統計量および Mann-Whitney 検定、Kruskal-Wallis 検定を行った。

② 看護の構成要素の抽出：先行研究と書籍による実践項目の抽出後、内容の類似性に従い分類し、看護実践項目を整理した。その後、乳がん看護に携わる看護師 186 名を対象として自記式質問紙調査を行い、主成分分析と探索的因子分析を行った。

③ 実践状況と影響要因に関する調査：乳がん看護に携わる看護師 168 名を対象に乳がん患者の意思決定支援実践と職務キャリアに関する質問紙調査を実施し、t 検定および一元配置分散分析を行った。

(2) 看護師が必要としている教育に関する調査

乳がん看護に携わる看護師 174 名に乳がん看護に関する学習内容の必要性についての自記式質問紙調査を実施し、基本統計量および Mann-Whitney 検定、Kruskal-Wallis 検定を行った。

3) 乳がん患者の初期治療への意思決定に伴う葛藤に関する調査

医師より初期治療の選択肢を提示された乳がん患者 165 名を対象に、術後 3 日、術後 3 ヶ月、術後 6 ヶ月に意思決定に伴う葛藤・困難感・満足度・がんに対する取り組みに関する質問紙調査を実施した。基本統計量および Mann-Whitney 検定、Kruskal-Wallis 検定、Spearman の順位相関係数の検定を行った。また、困難感に関する項目については因子分析を行った。

4. 研究成果

(1) 初期治療を行う乳がん患者に対する看護実践と意思決定支援への困難さ

① 看護師は、積極的に患者に声をかけ、患者が抱える不安や恐怖などに対して共感や傾聴といった精神的支援としての看護援助は困難と感じておらず、実践されている割合が高かった。その反面、患者の個性に応じた具体的な情報提供、セカンドオピニオンの説明や他の患者からの情報や場の設定・パートナーとの関わりを促す援助などサポートを強化する支援は、困難を感じ実践の割合が低かった。

② 外来看護師は、病棟看護師に比べ、患者の考えや思い・生活状況を確認することに困難さを感じ、実践の割合が低かった。外来においては、看護介入を必要とする時期に、短時間に適切な支援が求められるため、外来看護師には専門的な知識や技術の習得が必要であることが示唆された。また、困難と感じている看護援助項目の実施割合が低いことから、看護師が困難と感じている原因や問題点を明らかにする必要がある、外来看護の充実を検討する必要性が示された。

③ 外来と病棟との情報共有の必要性は言われ続けているが、実際には困難さを感じている看護師が多い。情報を共有できるシステムの確立が早急に求められていることが明らかとなった。

④ 経験が浅い看護師は、医師の説明の場の設定やセカンドオピニオンの説明に困難さを感じ、実践できていなかった。踏み込むだけの判断力と医師との調整能力の未熟さから困難さを感じやすいことが明らかとなった。

(2) 乳がん患者の初期治療選択に対する看護の構成要素

因子負荷量 0.4 未満の項目および複数の因子に高い負荷量を持つ項目を除外しながら分析した結果、17 項目が選択され、『患者個々の理解や思いを確認する』『生活者としての患者を捉える』『サポート役割を強化する』『理解者としての姿勢を保つ』『医師からの

情報獲得を支援する』の5因子として抽出された。5因子の累積寄与率は60.96%であり、因子的妥当性は確認された。また、それぞれのCronbachの α 係数は、0.89から0.59であり、ある程度の内的整合性が確認された。第5因子の α 係数が0.59とやや低めであるものの、信頼性が得られたと判断できる。

(3) 初期治療決定支援の状況と影響要因

① 看護師は、『患者個々の理解や思いを確認する』『理解者としての姿勢を保つ』支援は実施しているが、『生活者としての患者を捉える』『サポート役割を強化する』『医師からの情報獲得を支援する』はあまり行っていないかった。

② 『患者個々の理解や思いを確認する』『理解者としての姿勢を保つ』は、乳がん看護経験年数3年以上の看護師が2年以下の看護師より有意に実施しており、「治療方針を患者と一緒に確認する」「患者が必要とする情報・興味のある情報を意識する」「経済的問題を確認する」「患者のペースに合わせる」などの項目で有意差がみられた。

③ 『医師からの情報獲得を支援する』は、看護師経験年数13年以上の看護師が5年以下の看護師より有意に実施していた。

④ 病院の種類や勤務場所では支援状況に違いはみられなかったが、職務キャリアと実践状況には関連がみられた。患者を生活者として捉えて支援する必要性とともに患者の周囲のサポート強化と医師との連携の必要性が示唆された。

(4) 看護師が必要としている学習内容

乳がん看護の全般的な内容について学習ニーズが高く、特に告知時の看護、化学療法やホルモン療法など日々変化している治療に関する学習ニーズが高かった。乳がん看護の経験年数が3年以上の看護師より3年未満の看護師のほうが、「乳がん治療の動向」「手術療法」「化学療法」「放射線療法」「ホルモン療法」の教育の必要性を感じていた。また、外来勤務者のほうが病棟勤務者よりも「化学療法」「外来看護」に関する教育ニーズが高く、病棟勤務者が外来勤務者より「妊娠出産に伴う看護」「性への支援」の教育ニーズが高かった。

(5) 乳がん患者の意思決定過程における満足度の影響要因

乳がん患者は、情報を与えられ、サポートを得ており、適切な選択を行ったと評価していた。また、個人的因子や疾患因子、治療決定スタイルにより満足度に違いがみられなかった。このことより、治療選択においては、まずは患者自身が自ら取りたい決定スタイルに気づき、患者の意思に基づく取り組みを

支援していくことの必要性が明らかになった。困難感に関する質問23項目について、共通性を確かめるため因子分析した結果、《感情の不安定さ》《情報不足とサポート不足》《夫との関係性への不安》と考えられる3因子に集約された。Cronbachの α 係数は、全体で0.89、第1因子0.84、第2因子0.80、第3因子0.69であり、内的整合性が確認された。満足度と困難感とは負の相関が認められ、特に満足度と《感情の不安定さ》《情報不足とサポート不足》因子の多くの項目で負の相関が認められた。患者が納得する決定を支えるためには、治療選択時の患者の困難感の緩和が必要であり、判断材料である情報提供とともにサポート力の強化、精神的安定感をもたらす支援の重要性が明らかになった。

(6) 乳がん患者の初期治療選択に伴う葛藤

意思決定に伴う葛藤の因子平均値は2.36であり中等度の葛藤を示し、その中でも下位尺度である「不確かさ」の因子平均値は2.82と高い葛藤を示した。意思決定に伴う葛藤と個人背景や病気背景、意思決定役割の関連に有意な差は認められなかった。精神的回復力と葛藤とは弱い関連を認めたことにより、精神的回復力は葛藤に影響することが示された。うまく適応する過程・能力・結果である精神的回復力に関心を向けることは、治療選択の困難さを経験する乳がん患者の看護支援を検討する上で重要な要素になることが示唆された。また、意思決定に伴う葛藤と満足度の相関の検討においては、それぞれの合計得点間において相関を認め、特に「情報に関するアドバイスの不足」「決定の質の認識」における相関が強かった。意思決定に伴う葛藤には、がんに対する取り組みの下位尺度のうち「前向きな態度」と「絶望的な態度」がそれぞれ有意な関連を認めた。これらのことより、十分な情報提供を行ったうえで、自分で考える時間が確保できるような支援が重要だといえる。

(7) 乳がん患者の初期治療に伴う困難感とがんに対する取り組みとの関連

[感情の不安定さ]における困難感では、「周囲の意見に惑わされる」や「頭でわかっても気持ちがついていかない」などの多くの項目で術直後から術後3か月に継続して有意な相関がみられた。[情報不足とサポート不足]における困難感では、「手術後の自分の姿が具体的にイメージできない」や「自分の病状でわからないことが多い」などの項目で術直後に有意な相関がみられたが、術後3か月に有意な相関がみられない項目が多かった。[夫との関係性への不安]における困難感では「夫との関係の変化が心配である」のみががんに対する取り組み(回避的)と有意な

相関がみられた。困難感の[感情の不安定さ]における内容は、がんに対する取り組みの術直後から術後3か月まで継続的に影響している項目が多いことから、治療決定時より感情的な側面に対する介入が重要であることが示唆された。

(8) 意思決定支援を行う上での課題

乳がん患者の意思決定支援には、治療選択時の患者の困難感の緩和が必要であり、判断材料である情報提供とともにサポート力の強化、精神的安定感をもたらす支援が重要である。しかし、看護師は生活者としての患者にとって必要な情報を取捨選択したうえでの情報提供を困難と感じていた。また、パートナーへの関わりや医師からの情報提供を獲得する工夫を行っていないなどの課題が明らかになった。この傾向は、経験年数が少ない看護師・外来看護師に強く、これらの看護師は、治療に関する内容など実際の業務に不可欠な内容の学習ニーズが高いことから、意思決定支援を行う上での最低限の知識・技術を明らかにし、レベルに応じた教育が必要であることが明らかになった。

(9) セミナー開催

乳がん看護に携わる看護師を対象に、診断・告知におけるケア、治療選択における看護支援に関するセミナーを開催した。調査結果から得られた内容を整理し、講演と事例討論の形で進行した。質疑応答やセミナー後のアンケートより、看護師がどのような知識・技術を必要としているのか、臨床で困っていることや難しいことは何か、臨床でのコツやノウハウについて整理した。

(10) 教育プログラムの作成

実践で活用できる具体的な支援方法を提示するために、これまでの調査結果から医師決定支援に必要な看護師の知識と技術内容を検討した。その際、経験年数や勤務場所による違いによる必要性と重要度の違いを検討した。また、ツールとしてのガイドブック作成に取り組み、教育プログラム(案)を作成した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ① Hiroko Kokufu, Shinichi Kih-ara, Mika Murakami : Which content of nursing breast cancer is nurse wanted to learn? : Analysis of questionnaire survey from attendees of breast cancer

nursing seminar、Kumamoto University School of Health Sciences、査読有、7巻、2011、25-32

- ② 国府浩子 : 初期治療選択を行う乳がん患者が受けるサポート、日本がん看護学会誌、査読有、24(2)、2010、24-31
- ③ 前田優雅, 国府浩子, 藤井徹也 : 治療中の乳がん患者に及ぼす同病者からの影響と関連する要因、がん看護、査読有、14(6)、2009、711-716
- ④ 国府浩子 : 初期治療を選択する乳がん患者が経験する困難、日本がん看護学会誌、査読有、22(2)、2008、14-22

[学会発表] (計9件)

- ① 柴田亜弥子 : 在宅移行困難事例に対するがん看護専門看護師の介入の視点、第25回日本がん看護学会、2011年2月12日、神戸国際会議場(兵庫)
- ② 国府浩子 : 乳がん看護に携わる看護師が必要とする学習内容、第18回日本乳癌学会総会、2010年6月24日、ロイトン札幌(北海道)
- ③ 新貝夫弥子 : 乳癌補助化学療法におけるタキサン系抗癌剤による体水分貯留の特徴、第18回日本乳癌学会総会、2010年6月24日、ロイトン札幌(北海道)
- ④ 西尾亜理砂 : がん患者の治療法の意味決定支援に対する看護師の意識と行動に関する検討、第24回日本がん看護学会、2010年2月14日、静岡県コンベンションアーツセンター(静岡)
- ⑤ 新貝夫弥子 : 乳がん化学療法のレジメンによる体重増加と体水分貯留、第24回日本がん看護学会、2010年2月14日、静岡県コンベンションアーツセンター(静岡)
- ⑥ 宇津千晴 : 乳がん患者の母親としての思いと子どもとの関わり、第17回日本乳癌学会総会、2009年7月3日、ホテル日航東京(東京)
- ⑦ 国府浩子 : 乳がん患者の初期治療決定の困難感とがんに対する取り組みとの関連、第23回日本がん看護学会、2009年2月10日、沖縄コンベンションセンター(沖縄)
- ⑧ 国府浩子 : 乳がん患者の初期治療選択に伴う葛藤、第16回日本乳癌学会総会、2008年9月27日、グランキューブ大阪(大阪)
- ⑨ 国府浩子 : 乳がん患者の初期治療に関する意思決定過程の満足感への影響要因、第34回日本看護研究学会学術集会、2008年8月21日、神戸国際会議場(兵庫)

[図書] (計3件)

- ① 国府浩子：南江堂、成人看護学概論（自己決定を支える）、2010、154-158
- ② 国府浩子：医学書院、人体の構造と機能からみた病態生理ビジュアルマップ（乳癌）、2010、173-181
- ③ 国府浩子：医学書院、病期・病態・重症度からみた疾患別看護過程（乳癌患者の看護）、2008、1760-1777

6. 研究組織

(1) 研究代表者

国府 浩子 (KOKUFU HIROKO)
熊本大学・大学院生命科学研究部・教授
研究者番号：70279355

(2) 研究分担者

村上 美華 (MURAKAMI MIKA)
熊本大学・大学院生命科学研究部・助教
研究者番号：90321950
柊中 智恵子 (KUKINAKA TIEKO)
熊本大学・大学院生命科学研究部・助教
研究者番号：60274726

(3) 連携研究者

阿部 恭子 (ABE KYOKO)
千葉大学・看護学部・特任研究員
研究者番号：00400820

竹井 留美 (TAKEI RUMI)
名古屋大学・医学部・助教
研究者番号：80402626

(H21 まで研究分担者)

前川 厚子 (MAEKAWA ATUKO)
名古屋大学・医学部・教授
研究者番号：20314023

(H21 まで研究分担者)

安藤 詳子 (ANDO SHOKO)
名古屋大学・医学部・教授
研究者番号：60212669

(H21 まで研究分担者)